



苦の臨床という「現場」

吉水 岳彦

(浄土宗光照院住職、「ひとさじの会」代表、大正大学非常勤講師)

【提題要旨】

日本の出家僧侶にとって、いったい何が「現場」なのであろうか。「僧侶」を職業として考えれば、死者の年回法要や葬送儀礼を執行したり、寺院を運営したり、依頼された法話したりする場面が「現場」なのかもしれない。しかし、仏門で出家して「僧侶」になることを生き方として選択した者にとっての「現場」は、そのような場面のみに限られるものではないだろう。仏陀ご自身が「人生は苦である」との認識の上でさとりに向かう道を進まれ、数多くの絶望した者の受け皿となったように、生・老・病・死にまつわる一切の苦や煩惱に振りまわされ、苦悶し続ける自己や他者と向き合うあらゆる場が「現場」であり、仏門の僧侶にとっての臨床の場といえよう。

加えて、僧侶の行う教化活動は、苦の臨床に立つことで、自己のあり方を問われ、葛藤し、苦悩するうちに学びとった知見を世間の人々と分かち合うことであり、その上で、自身が心底から求めるさとりに救いの道を「共に歩もう」と声をかけていくことであろう。苦に満ちた世界を生きるすべての人々と、お互いに支え合い、共に済ませようとする、さまざまな僧侶の「現場」を紹介しつつ、そんな「現場」に立つ僧侶とは、今後いかにあるべきかを考えてみたい。

(よしみず・がくげん)